

シンポジウム

100年後の青少年に向けて — 新世代について考える —



〈司会〉小牧

これからおよそ1時間「100年後の青少年に向けて」サブタイトル「新世紀について考える」をテーマに3名の会員にお話いただきます。

それでは3名の皆さんをご紹介します。まず大会のコ・ホスト鹿児島西ロータリークラブ会員で地区青少年交換委員会委員長古木圭介さんです。お二人目は来年のホストクラブである宮崎西ロータリークラブ会員で地区青少年交換委員会委員のマイケル・ロバート・インディゴさんです。三人目は本大会コ・ホスト鹿児島サザンウインドロータリークラブ会員で昨年GSE派遣団長をされた赤塚晴彦さんです。古木圭介さんよろしくお願ひ致します。



〈古木〉

今日はお二人の方に最初にお話いただきますけど、15分ずつそれぞれお話をさせていただいて、残り時間がありましたら言い足りなかったことを付け加えて言っていただきます。それぞれ自分のテーマでお話をさせていただきます。

ちょっと冒頭で感じたことを申し上げます。オープニングで小学5、6年生のリトルチェリーズというジャズバンドの演奏を聞かれたと思います。彼らは練習をしてもわずか2年、3年でございます。いかに若いということが素晴らしいかということを示す一つの見本なのです。指導なさっていた大西先生は3年ないし5年で学校を移っております。学校を移ると、またその学校で新た

にリトルチェリーズを作るのです。もう4ヶ所ほどの学校でリトルチェリーズができておりますが、その都度、全国大会で上位、または優勝しております。指導者が良ければあれ程の素晴らしい演奏ができるということと、もう一つ、若いということはずごく吸収が早く素晴らしい演奏にたどり着けるということだと思います。子どもたちには可能性がたくさんあるわけです。例えば子どもたちが宇宙飛行士になる志を抱いたとすれば、なれる可能性は非常に高いと思います。しかし、ここにお集まりのロータリアンの皆さんに「今から宇宙飛行士になれますか」と聞けば、ほとんどの方がNOでしょう。99.9%可能性がないわけです。つまり、あの10歳、11歳の方々には未来があるわけです。やる気さえあれば。

後ほど私の考えは申し上げますので、最初はマイケル・インディゴさんにお話を伺います。マイケル・インディゴさんと私は一緒に青少年交換の委員としてお仕事をさせていただいています。今日はこちらにジョン・リンドレイ君がいますが、彼らが着きますとカウンセラーとして日本での心得を非常に厳しく指導していただきます。最初に厳しくしないといけないのです。最初に厳しくしていただくのがインディゴさんの役目ですが、現在は宮崎市内でレストランをやっています。私も時々友人と食べに行きますが、大変おいしい洋風お惣菜のユニークなお店です。それではマイケルさん、15分以内でよろしくお願ひします。

〈インディゴ〉

みなさん、こんにちは。ステージに上がる前に先輩



から「英語で話せばいいよ」とか「宮崎弁でもいんげな」とかいろいろ言われたんじゃないけど、せつかくの場ですからできる限り標準語でがんばりたいと思います。私はシンポジウムという言葉に「ぶつけてみたい」と解釈してしまう

ので、今日はシンポジウムということで、ぜひ皆さんに提案したいと思います。

皆さんが毎日飲んでいるコーヒーに関しての話です。コーヒーという飲み物は日本に輸入されてくるわけですが、10年前までは主に小さな生産者、ファミリー農家で栽培されました。自然の海拔の高い雨林の中での栽培です。上に大きな林があって、その下にコーヒーという小さな植物があって、その周りにも漢方薬や食料品になる植物があって、いくつかの植物とともに育ってきたわけです。そして、アメリカでコーヒーブームが起きて消費が増えると、いくつかの東南アジア、アフリカの国が収入になるからとコーヒーの出荷量を大幅に増やしました。出荷量が増えるということは相場が下がる、単価が安くなるということで金額が下落してしまっ、従来のコーヒー栽培をしている農家の方々はとても苦しくなりました。そこで、上にある林を全部伐採したら直接日光が当たって出荷量は増えるのではないかと案が挙がりました。コーヒーという植物の遺伝改良に取り組んだら日光を直接浴びても耐えられる改良種ができ、同じ面積からの出荷量が速やかに2倍か3倍に跳ね上がります。同じ面積から2倍か3倍なんて奇跡でありまして、ありがたいことです。しかし、そこから起きてくる問題点もいくつか表面化しました。まずコーヒーを改良するとき、優先順位が味ではなくて日光に絶えられるコーヒーづくりに取り組む必要がありました。そして後になってわかったことですが、木々から落ちてくる枝葉は土の肥やしになるので、林を破壊すると環境まるごと破壊することになって土が枯れます。土が枯れることによって、今まで使わなかった肥料を与える必要がでてきます。そして雨が降った時にまるごと流れて土の持ちも悪いということで灌漑設備も付け加える必要がありました。従って、今まで肥料、農薬をほとんど使う必要がないところに化学肥料、農薬、殺虫剤の利用は大幅に増えました。それと同時に渡り鳥の種類が五分の一に減少して、林に存在していた哺乳類も絶滅しました。北米型の農業になったのです。化学肥料、灌漑施設などとてもお金がかかるので、小さな農家の方々はやっていけません。土が枯れて肥料、農薬、殺虫剤の繰り返し

です。その中でコーヒーの味はどうなっているのか誰も意識せず、安全かどうかの優先順位も低いところにあります。

では、どうしましょう。現状をどうすべきかとなった時に、このやり方が一番環境にいい、農家にもいい、残すべきものだという話になりました。つまり日陰栽培、上の林を日よけにして、その下に自然の植物としてコーヒーを栽培するという形式をとっている農家には認定をしましょうと。日陰栽培者という認定制度ができて、今それが少しずつ普及しているところなんです。日陰栽培の特徴としては、従来通り多数の植物の中、渡り鳥も哺乳類もいて、改良されていない本来の味が出るコーヒーを栽培していくという形式です。そして、自然の堆肥をそのまま生かす低農薬もしくは無農薬にもふさわしい環境です。その中で、小さな個人経営の農家でも商売が成り立つ形式です。では欠点はと言いますと、もちろん割高です。限られた面積の中なので多くは収穫できません。しかしそのコーヒーは本来のおいしさです。

この話と青少年との関連性は何かと言いますと、その貧困国の後継ぎ問題。貧困国の農業が欧米型になることによって若者は農業に魅力を失い、国の農業は破壊され、そして環境自体が破壊されることとなります。ではロータリーの役割とはというと、私は今日思い切って皆様に提案したいと思います。ロータリーは今までのような国に行って設備を作ったりお金を寄付したりしてきましたが、ロータリーの方々の知識と経験を生かして日陰栽培の認定制度を強化し、消費者の方々にわかりやすい透明度のある認定制度を作り、消費者は自分の選択で環境に優しいというより環境に正しいコーヒーを飲むかどうかを自分で選びます。情報を持って選ぶことができるのです。ロータリーは全世界の組織で各原産国にもクラブがあります。そのクラブの協力から我々が消費者の情報提供というところまで。環境に優しいコーヒーがあると。しかもおいしくて体にいい。どっちみちコーヒーを飲むなら後10円払って、自分にも地球にもいいコーヒーを飲んだらどうかと考えています。そうすれば我々はどこにも行く必要なく、毎朝コップに入る液体から貧困国の環境を助けることができます。

今日はこの話をしているかとても悩んだんですけど、ギリギリまで悩んで、川尻会長代理の話を聞いて、よし！思い切って話してみようと思いました。ありがとうございました。

〈古木〉

大変、考えさせられるお話でした。農業や農産物の安心・安全問題はずっと語られてきましたが、あまりロータリーの中では聞いたことがありませんでした。インディゴさんは川尻会長代理の言葉に勇気づけられて発表する気になったとおっしゃいました。最後に言われたロータリーが何をなすべきかということに対して、ロータリーが認定制度を作って格付けをすればどうかという話です。これは非常にいい提案で全世界に通じるいいお話だったと思います。

次に赤塚晴彦さんをご紹介します。赤塚さんは鹿児島サザンウインドを立ち上げる時のメンバーで、初代から続けて3年目まで会長をされたという経歴の持ち主であります。赤塚学園という専門学校の理事長をされていまして若い方に非常に理解があるのですが、大学院に入られて農業の研究もなさり県の仕事もされております。もう一つ、今年GSEのチームリーダーとしてドイツに行って来られ、向こうの事情にもよく通じておられます。今日は「海洋国家の日本人へ」というテーマで話されるようです。15分間よろしくお願ひします。



〈赤塚〉

ただ今、ご紹介いただきました赤塚でございます。学生をお預かりしておりますので、今日は古木さんから、こういう話をしてくださいということでありましたけど、まず100年後のことを語るということ、青少年に触れるということ、そして環境問題に触れる、ロータリーに触れるという4つの条件の元で15分語りなさいと。これは随分悩みました。先にインディゴさんの話をお聞きしましたが、実は私の話とダブっているのです。

先ほど、古木さんからご紹介を受けたように私は鹿児島県で第2号のオーガニックの検査員もやっております。今はちょっと休んでおりますが、県下70町歩、屋久島まで二十数農家を検査致しまして、今のコーヒーのお話ではありませんが、無農薬、有機栽培の農家を認証するという仕事です。そういう食糧の問題を通して、新世代にどういふことを私たちが伝えていかなければならないかということ、ロータリアンとして考えておるわけでございます。プログラム14ページに「海洋国家の日本人へ」と私が書きました。実はこの冒頭に漢字4文字が入っているのですが、意図的に4文字を削っていただきました。後でこの答えを皆さん

方と一緒に考えればありがたいなと思っております。

そこで、ちょっと画面と一緒に見てみたいと思います。食糧の話をする、どうしても人口問題が関係してきます。このグラフは、人類が誕生して今日まで人口がどのように増えてきたかという推移を表したものです。だいたい紀元10世紀までは2億5千万でした。人類が誕生したのが200年から250万年前と言われておりますので、250万年間は2億5千万だったと。ところが10世紀を超えた頃から人口が増え始めました。地中海貿易だとか、大航海時代だとか、コロンブスがアメリカ大陸を発見してジャガイモや小麦を持って帰りました。それから農業革命が起こりまして、全く農耕が違ってしまいました。そして産業革命を経る頃に、だいたい10億になっております。17世紀です。後はずーっと一直線に上に伸びてきています。それは第一次大戦、第二次大戦を経ましてアメリカ型のライフスタイルが世界中に拡散致しまして、大量生産、大量流通、大量消費、大量廃棄、もちろんこれは環境に大きな負荷をかけてしまいました。17世紀から20世紀までに、何と10億から一気に60億まで増えたわけでありまして、300年の間にこんなに増えてしまったと。紀元2050年になりますと100億を突破するだろうと言われております。

このことに対して食糧はどうなるのか。マルサスの人口論、ご存じとは思いますが、人口は幾何級数的に伸びるけれど食糧は算術級数的にしか伸びないと。そういう中でレスター・ブラウン博士がだいたい60億が限界ではないかと言っておられます。ところが最近の科学者の研究では80億位まではいいのではないかという研究レポートも出ています。しかしこれは遺伝子組み換えというような技術を用いての話です。従って50年先に大きな食糧問題に直面することになります。次のグラフでは数学の力を少し借ります。グラフ化しますとL1曲線とL2曲線になるわけですが、実は約250万年間の人口というのはフラットでした。これをL1としますと、微分してDTのDXは0という。これがPですね。Pポイントのところから一気に無限大ということになりますと、これは0ポイントのところから0と無限大ですから収束と発散ですね。これは経済学的に言いますと破壊です。しかし天文学的に言いますとビッグワンです。2050年には私たち人類にとっては大きな問題が生じてくるような気がいたします。これはデータ上のお話でございます。

これを私の基本認識としまして、整理してみます。私は3つの観点で常に考えております。まず発展途上国の人口問題を食い止められるか。これはロータ

リーと大きな関係があります。それから今日以上に破壊することのない経済システムを我々が構築できるかどうか。もう1点の可能性は大変少ないと思っておりますけれども、人類外野の最終的な破壊、あるいは破滅を意味する世界大戦を回避することができるかどうかということの基本認識として考えております。

そこで本論に入りますが、グレンE・エステスRI会長は、新世代月間に際しまして「青少年育成は次世代への投資、インベストメントである」とのメッセージを送られました。話が変わりますが、2001年1月21日付けの日本経済新聞で大きく報道されたことです。日本は50年間に渡り、若い外国人労働者を毎年60万人ずつ受け入れないと日本経済は破綻する、という非常にショッキングな記事がトップに出されました。これは実質上の国連の勧告でございます。このことは世界の人々は日本経済の没落を望んでいないということであろうかと思っております。今日の南日本新聞では、フィリピンと日本との2国間協定で看護師と介護師については国籍条項を撤廃するという記事が出ました。それからもう一方では外国人犯罪につきまして、私は留学生を40、50人預かっていますけどマスコミや国民の反応は、特に発展途上国の留学生につきまして全く排他的と言っていいくらいの過激な異常反応を示しております。しかし私たち日本人は国際貿易をしていくしか道はございません。国際貿易、物流はOK。しかし人の交流はNOです。流入はNOです。果たしてこれが許されるかどうかです。人の交流はNOということは江戸時代の鎖国と全く一緒でございます。ここで私が考えますことは、留学生を含む外国人の受け入れとは、当面、企業の労働力を補てんするだけの経済利益でございます。そのことと貿易立国としての日本人、私たちが世界に対して果たしていかなければならない責任とは一致するものではありません。外国人労働者という異文化を日本人一人一人が理解して、日本文化と共鳴、共感し日本社会全体を利していくようなプレステージの高い文化国家・日本を創設していく必要があると考えております。

そこで青少年に期待するということになります。私は今年ドイツの1840地区をGSEのチームリーダーとして訪問する機会を得ました。たくさん感動致しましたが、本件に関して3つの点を挙げておきます。まず到着したその日に着替える間もなくミュンヘンロータリークラブのローターアクトクラブインターナショナルのチャーターナイトの日でございました。もう一つ感動したことは、オーガニックのことである農家に入って行きましていろいろとお話したら、アメリカ農業にはドイ

ツ農業は絶対負けないという力強い話を伺いました。三番目は、住居はミュンヘン、しかし会社はイタリアやフランスにある。例会はミュンヘンのロータリークラブに出席すると。こういう国境のない交流がすでに始まっているというわけです。こういうことを考えますと私たち日本という国はもともとは海洋国家です。ヨーロッパは大陸国家だと私は思っております。特に海のない、出口のない国家、例えばロシアとか、かつてはモンゴルとか、中国にしたって大陸を向いておりました。従って温かい海を求めて常に食糧を求めてやってくるわけです。しかし我々日本という国は温かい黒潮と南風(はえ)、サザンウインドに囲まれて国家を作ってきたまさに海洋国家でございます。安土桃山時代に泉州堺を中心にしてルソンとかアンナンとかカンボジアとか遠くはオランダとかスペインまで私たちの祖先は出かけて行きました。当然、巧みに外国語を操りながら行ったことだろうと想像します。こうして私たちは海洋国家であったはずなのですが、徳川時代に300年という鎖国政策をすることによって、世界でも有名な島国根性と言われるような国家になってしまいました。排他的、排斥的で純血主義と言うような国家になってしまった。私はこの呪縛と言いましようか、マインドコントロールをまだ日本人は解いてないと。まだマインドコントロールの中で生活をしているような気がしてなりません。特に観光。日本から海外へ行く観光客は4千万です。日本に訪れる方は4百万人です。これは日本に魅力がないのではなく、日本人自身が私たちの文化を自分たちで発信していないからそういうことになっているのだと考えております。

今後ロータリアンとして、あるいは青少年に期待することとして私は3点考えております。一つは正しい日本語をしっかりと勉強すること。その上で外国語を一つ、二つ、特に英語をしっかりと勉強してコミュニケーション能力を高めること。そして外国の方々に対等の立場でディベートができること。三つめ、異文化をこのことによって理解すること。異文化の理解は理屈ではありません。ラッキョウの味を説明するのに1枚1枚はいで食べてもラッキョウの味がしないのと一緒です。がぶ飲みをすることだと思います。そういう姿勢がロータリーに必要ではないかと。そして偏見のない大らかな文化国家、プレステージの高い日本国家を構築していくということを期待しておるわけでありまして。現在、ロータリーの中で新世代に向けた様々なプログラムが用意されております。青少年交換留学もそうです。年齢は上がりますけれどGSE、インターアクト、ローターアクト、あるいは職業を知るプログラムというのをもたくさ

んございます。しかし、まだ突っ込みは足りないような気が致します。現在4百万人を超えるフリーターがいると言われておりますが、このあたりも私たちは大いに取り組んでいく必要があるかと思えます。そして最後に、幼稚園から高等学校までPTA活動がございまして。お母さんにPTAを任せないで、今こそロータリアン一人一人がPTA活動に積極的に参加し、ロータリアンとして適切な発言の機会を得ていくことが新世代に対して最も効果的な近道ではないでしょうか。そのようなロータリアンの活動を通して、期待される新世代の青少年が育つのではなからうかと考えております。



〈古木〉

赤塚先生ありがとうございました。お二人に共通するところはやはり環境問題で、私も述べたいことは同じです。私たちがどんないい仕事をして環境が破壊されては足元から崩れていくわけですから。我々はこの2000年間位、足元の環境を食いつぶしながら豊かな生活を得てきたということが言えます。今お二人の話の中にありましたことは、突き詰めるとそういうことだと思います。豊かな社会をずっと維持できるのかどうかという大きな問題が、我々の前に立ちだかっています。しかし私たちが後100年生きるわけではありませんが先ほどのリトルチェリーズの方々は50年以上は充分生きています。さっき2050年の人口問題が出ていましたが、2050年に人口は93万人位になるのではないかと。中国は一人っ子政策でこの時に15万人位で止まっているだろう。しかし今10億しかないインドが16億になっているだろうという統計が最近出されております。そういうことで私も環境については問題意識を持っております。

今年は台風がすでに10個上陸致しました。温暖化であろうという人もおります。10個の中で死者が100人位は出たのではないのでしょうか。温暖化というのはCO2の排出が著しい中で、地球がCO2で覆われはじめて暖まってくという現象です。地球の温度が5度上がると相当な氷が溶け出していくわけですが。5度上がってしまうと氷山が溶けて水位が5m上がります。当然、鹿児島市内は大部分が海の中に埋まるという現象が起こって住むところがなくなると。そこで1977年、京都で環境サミットがありました。そこで1990年の時代にCO2の排出を抑えよう、みんな批准しなさいと申し出をしましたが、なかなかこれが批准しない。一番批准しないのが、一番汚染しているアメリカです。CO2

の排出量が多いのはアメリカが1番、中国が2番、ロシアが3番、日本が4番、インドが5番となります。この中で除外されているのが中国とインドです。発展途上国は批准をしなくてもいいとなつていますが、これは問題があると思えます。この中でロシアがもうすぐ批准をします。これは非常に大きな意味を持つと言われております。全体的には5.2%下げると言われております。下げることによって少し温暖化が緩和されるでしょう。そのうちアメリカも世界の圧力で下げることになるだろうと思えます。CO2の量を科学的に測っている機関が国連の環境問題を扱っているところにあります。西暦1000年から1800年まで大気中のCO2の量は280PPMだったそうです。これは一貫して変わらないそうです。先ほど赤塚先生の話にあった1800年代、英国の産業革命と同時に石炭と石油が入って参りますが、これで一気に増えて2002年は379PPM。200年間で一気に増えたわけですが。800年間同じだったものが200年間で一気に増えていくわけですから大変な問題が起こります。

そして人口問題も先ほど触れられました。1900年には16億しかいなかった世界の人口が1950年に25億に増えております。2000年には61億に増えております。特に発展途上国でどんどん増えているのですが、本年の統計では63億と言われております。それが2050年には93億になるであろうと。1972年には地球に人間が住める可能性、これをエコロジカルフィットプリントと言うそうですが、それが0.8で残り0.2はまだ地球に余裕があるということですが。でも2002年には地球が1.2個ないと足りないということになっているそうです。これが問題なのですが、全世界の人口が先進国並みに、発展途上国が我々の今の生活と同じレベルになった時に地球は何個いるか。今でさえ1.2個必要です。中国、インド、インドネシア、アフリカの人たちが我々と同じ生活、車を1台持って一戸建ての家に住んでテレビやコンピューターを持つような生活をしたと想定した場合。地球が4個いると言われております。これは一つの想定ですから、どうなるかわかりませんが、4個いるとなるととも我々は住めないことになるわけですが。そういう恐ろしい状況が目の前にぶら下がっている時に、この若い人たちが日本でどんな教育を受けているのだろうかということは大きな問題だと思えます。

例え話を一つ。屋久島が10年ほど前に自然遺産の登録をされまして、今まで数万人だったのが一気に何十万人という人たちが屋久島を訪れるようになりました。屋久島の人たちは経済的に豊かになったから非

常に喜んでおります。しかし本当は屋久島に人が来ない方が自然は守れるわけです。人類は自然を破壊しながら豊かになっていくわけですが、もし遺産登録されなければ屋久島の人々はそれほど豊かにならなかった。しかし自然はそのままの状態を多分保てたでしょう。私は山が大好きで屋久島によく行きますが、私も登らなければ本当はいいわけです。そういうことで今度は屋久島に酸性雨が降ると。屋久島にレンタカーを入れるのをハイブリットにしよう、としたとしても結局はダメです。酸性雨の原因は中国から来るわけですから、中国を何とかしなければ屋久島の自然は破壊されていくわけですが。すぐ身近な例でそういうことが起きているということで、私たちがロータリアンとして何をなすべきか。この辺のことを若い人へバトンタッチする時代がやってきているのです。もっと身近な例でいきますと、これが終わりますと今からパーティーがあります。私は8年あまりホテルでゼネラルマネージャーをやったことがあります。その時にいつも嘆かしていたと思っているのが生ゴミの量です。今日ラジオを聞いていましたら、1日に4人家族でどれ位の生ゴミが出るのか。平均的に1キロ位。一人が250グラム位ずつ出すそうです。処分は焼却などいろいろな方法で努力してやっています。ある時にあるホテルが計ったのでは、1800人の大宴会後の生ゴミの量が400キロだったそうです。すごい量です。これが毎日のようにホテルでは出ております。ある時にバイキングスタイルのフェアをやりました。大人は2500円で、子どもは1200円で食べ放題。バイキングというのは合理的に食べようという欧米から来たスタイルなのですが、日本では食べ放題だけが残り、それが残り放題にもつながってバイキングをやった後は必ずと言っていいほど生ゴミが増えていました。どうしてだろうと見ていますと、幼い子どもはテーブルに座らせていて子どもの食べられる量を考えずに山盛り取ってくるのです。子どもは当然食べられないから残します。親も食べません。ケーキやステーキの端くれが山ほど残っていて、サッと出て行きます。バイキングの意味が全然なされていません。そういうことで日本の食生活はどうなっているのだろう。日本の需給率は40%を切っています。そういうことは家庭でも学校でも全く教えられないまま豊かさだけを享受してきたという。そして我々は今、滅び行く日本というのを抱えているのではないかと。大げさに言えばそういう問題を子どもたちに宿題として残して、我々はあの世に行ってしまうことになるのではないかと最近、非常に危機感を抱いております。突き詰めると、幼児教育から始まって15歳までの教育、18

歳までの教育が我々にできていないのではないのでしょうか。受験勉強で明け暮れてしまって、今のエリートというのができてしまった。これから外国と伍していくためには、根本から考え直していく必要があると思えます。

私は61歳になりますが、我々が育ってきた61年間よりも、新世代は辛いことが多い時代に入るのではないかと思います。そういう危機感を持ちながらこのシンポジウムを引き受け、ぜひ皆さんにも考えていただきたいと思って話しました。結論的に言うと、今、コーポレート・ソーシャル・レスポンシビリティ。企業が社会に対してどう責任を取っていくのか。これが一つの格付けになる時代がやってきていると思えます。もっと言えば、我々一般市民がどういう社会的責任を取れるかが今からの大きな課題です。ロータリーはずっとそれをやって来たと思えますが、もっとも力を入れて今後やっていかなければならない問題だと思えます。私が考えてきたことはだいたい話しましたが、お二人はもう少し言っておきたい話があると思えます。マイケルさん、3、4分で付け加える話があればどうぞ。

〈インディゴ〉

今日の話をもとめてみますと、今の日本は突き当たりにはきていると思えます。これから長期間のために苦い薬を飲み込んで短期間我慢するのか、長期のことを考えずにやっていくのか、どちらかのところに来ているのではないかと考えます。

〈古木〉

ありがとうございます。苦い薬というのは本当にその通りですね。赤塚先生いかがですか。

〈赤塚〉

最初に戻りますけれど、私の答えは島国国家です。「島国国家から海洋国家の日本人へ」と締めくくらせていただきたいと思います。

〈古木〉

ありがとうございました。私たちは若い人たちをどのようにいい日本人、国際人に育てていこうとしているのか、未来予測をしな過ぎたのではないかと



反省があります。戦後60年を経とうとしております。豊かさとは何だろうと、今いろいろなテレビでも取り上げています。社会で暮らすリーダーたちが何を考えて社会をリードしていくか。会社でいえば社長の役割、地方自治体でいえば組長の役割、国でいえば首相の役割。国の役割はどうかわかりませんが、やはり地域で暮らす私たちのリーダーは誰なのかによって社会の良さや悪さが決まるのではないのでしょうか。

イギリスの教育の本「自由と規律」を池田潔さんという方がお書きになった。この方はイギリスのパブリックスクールに通ってオックスフォードで教育を受けられた方で、12歳から18歳でその人が良い人生を送るか悪い人生を送るかが決まると言っています。その12歳から18歳というのはちょうどパブリックスクールで学ぶ6年間です。パブリックスクールで何を基本に教えるのかということが書いてあります。肉体と精神を鍛えることに中心を置いていると。そしてノーブレスオブリージという言葉が書いてありました。ノーブレスとは高貴な人、エリートです。オブリージとは義務です。ノーブレスオブリージが基本であると。何か国に事が起こった時は、そのエリートたちが率先して国を守るために働くのであると。パブリックスクールはその精神を教えるのであると書いてありました。私は感動してその本を読ませていただきました。

日本には昔そのような教育があったにもかかわらず、私たちはそれから遠のいて久しいと思います。ロータリアンの先輩方は、その昔の教育を受けた方で、い

いところを持っていらっしゃる方がたくさんおられます。それを私たちが受け継いで、私たちが更に下にそれを教えていくことが大変大事な時代になったのではないかと。私たちはそういう良い伝統をもう少し世界から学び、日本から学び、若い人たちを育てていきたいと思いました。今日、お二人の話をお聞きしても、長いスパンで世界を計ることが大切だということを感じたような気が致します。

これで終了させていただきますが、お二人の先生方ありがとうございました。皆さんありがとうございました。

〈司会：小牧〉

本当にありがとうございました。100年後の指導者を作る、それには教育、指導力、環境問題、さまざまなお話が出ました。古木会員、インディゴ会員、赤塚会員、どうもありがとうございました。

